

2009(平成21)年2月

# Quarterly report



『宝石』創刊号



『別冊 宝石』創刊号

No. 71

## 目次

- ◆2 二松学舎47年 野村邦近
- ◆3 高山寺典籍文書綜合調査団のこと 白藤禮幸
- ◆4 三島中洲について 吉田公平
- ◆5 本学教員出版一覧  
(平成19年11月1日～平成20年10月31日)
- ◆6 資料紹介『絵入 志保やき文章』全2巻
- ◆7 資料紹介『宝石』・『別冊 宝石』
- ◆8 開館日 案内  
本学の出版物紹介(抄)・表紙解説

# 季報

二松学舎大学附属図書館

### 文学部中国文学科 教授 野村 邦近

来し方を振り返ると、得てして人の記憶は聊か美化されるのを免れえないが、私にとっては、やがて半世紀に及ばんとするほどに二松学舎と関わったのかと、今さらながら不思議に思えてくる。題を『二松学舎47年』としたのは、実は学部入学以来今年度末に至るまでの年数である。そのうち教員として勤務した年数は35年であるが、学部卒の数年も院生時代もすべて「中国語文研究会」の指導に深く関わってきたので、どうしても連続する47年という意識になる。

入学当初の校舎は木造2階建て、青葉通りから急勾配の石の13階段を上ったところに中洲像があり、教室が数室しかないというとても大学といえるような建物ではなかった。偶然にも中学高校ともに公立ながら当時の文部省優良施設校に学んできた私にとっては、この落差がおもしろかった。しかし貧弱な設備に反して、あらゆる分野に於いて教授陣は超一流で、冬ともなれば隙間風の吹き込む教室に、我々学生が自ら達磨ストーブにコークスを焼べて老教授の入室を待ったものである。それが卒業時までには5階建てのビルに変わり、やがて現在の建物になるまでの私にとっての47年であった。

入学と同時に中国語に興味をもったわたしは、当時国文学科の学生であったにもかかわらず、老舎翻訳で有名な竹中伸、趙樹理等の翻訳の中澤信三、漢詩人でもあった高木宣の三教授に初歩の教育を受け、やがて専門課程に入ろうとする頃、入学時に受講を目指した山岸徳平、中田祝夫教授が去られたのを機に中国文学科に転じて、一橋を退官後こられた熊野正平博士に長く指導を受けることとなった。また大学の授業のみならず、湯島の聖堂に足を運んで、中山時子、水世娣先生の薫陶を受け、一方古書店で見つけた倉石武四郎博士の「支那語教育の理論と実際」に強く惹かれて、中国語教育の実践に努めた40余年であった。思い返せばなんともよき時代であった。学内では加藤常賢博士の授業を受け、飯田橋の倉石中国語講習会（現日中院）にいけば倉石博士の紅樓夢の授業があり、岩波ホール等ではしばしば吉川幸次郎、貝塚茂樹博士ら京都学系の講演がきけたのであるから。

さて私が中国語教育において研究会の指導で力を入れ

たのは、まずオーラル面では発音の徹底的指導、ついでヒアリングでは教材の聞き取りから北京放送の聴取までを求め、スピーチは日常会話からグループ対抗のディベートの実施までを試行錯誤をくりかえしながら完成させた。また読解力養成においては文法の理解と文の分析を徹底して最終段階は文言文の読解までを実践してみた。一方上級の授業においては文献読解力の向上とともに、ゼミではもっぱら魯迅を中心にする中国現代文学の研究に学生とともに楽しんだ。この一見理想的にして現実には到達できそうもない語学の習得と外国文学の研究法探索が、ある時期それなりに実施できたのだから、誠に僥倖の教員生活であったといえよう。

私の成果はともかく聊か私の誇りとするところは、送り出した卒業生の活躍ぶりである。中高大学の教員になった者はもとより、もともと教師志望ではなく、企業で働こうと考えていた私の夢を、ことごとく商社・メーカーで実践してくれている多くの教え子たちに対し、その仕事ぶりには常に敬意の念を抱いている。そして、35年の教師生活と、40余年の研究会指導を通じて私流の教育観にもとづいた教育実践の場を与えてもらった二松学舎に対しては深く感謝しなくてははいけない。昨年130周年を記念して二松学舎小史「明治10年からの大学ノート」の編集に関わった折、専門学校時代の卒業生の多くが、山田準校長に励まされたことを記し、また昭和10年代後半、戦時色濃くなって、勤労働員で働く現場にまで教授が訪れて授業をしてもらったと語る文を読むに至って、教育の原点を守り続けた二松学舎の良き伝統を思わざる得なかった。今後も永くその伝統が絶えぬよう心から願ってやまない。



## 高山寺典籍文書総合調査団のこと

文学研究科国文学専攻 教授 白藤 禮幸

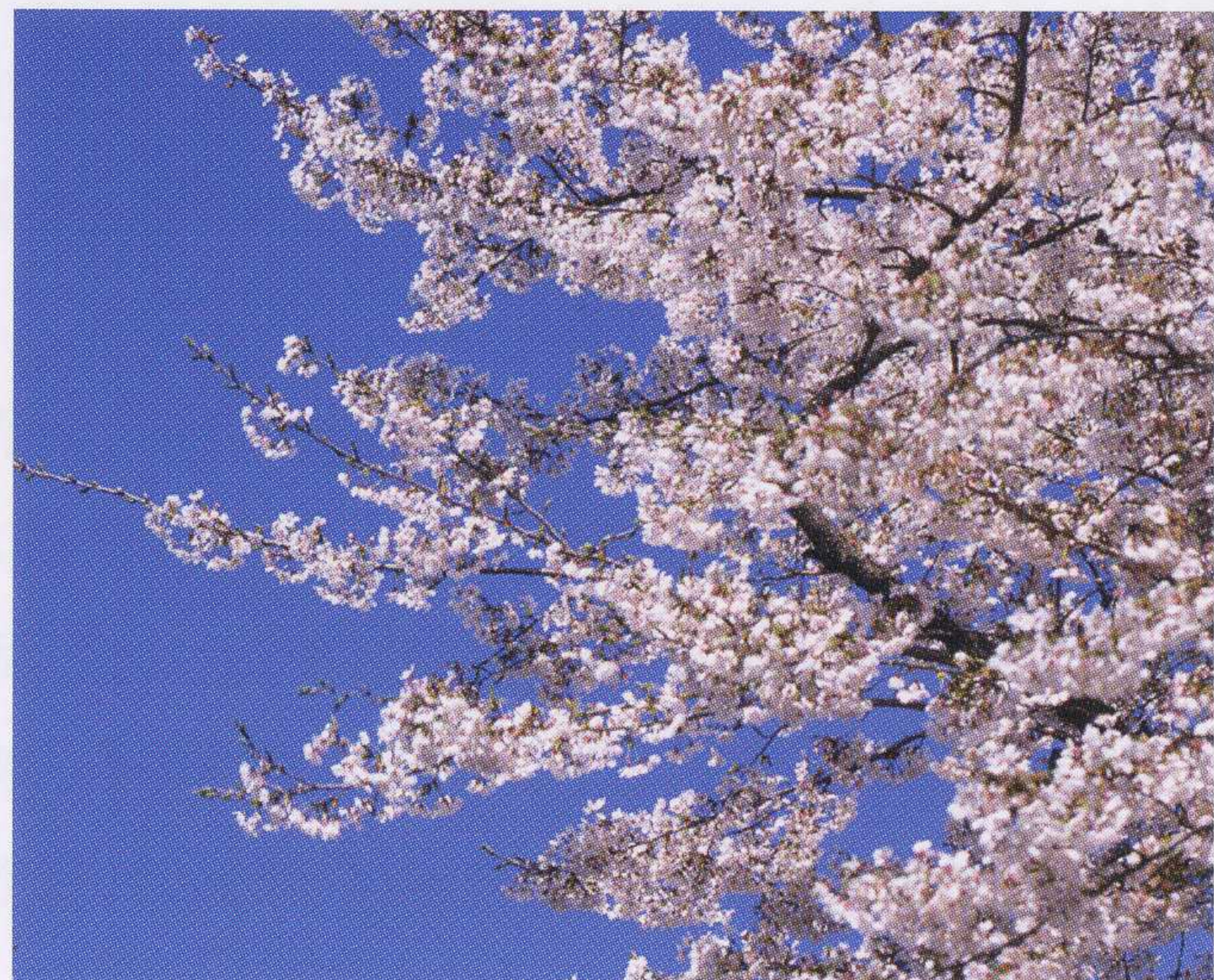
高山寺は、鎌倉時代の初めに明恵上人によって基礎が造られた古刹で、「鳥獣戯画」を始め、多くの国宝・重文を蔵する寺院である。京都の西北の山中にあったため、都での度々の戦火をも免れ、当時の華厳学を中心であった歴史をその伝えられて来た沢山の典籍に反映している。私が恩師築島裕先生に導かれてお寺をお尋ねしたのは、昭和42年の春、大学院博士課程二年の時であった。御挨拶と閲覧のお願いを申し、お許しを得て再び七月に参上し、その時は国宝「篆隸万象名義」を三日間調査させて頂けた。当時、鉄筋三階建ての収蔵庫があり、その二階・三階の戸棚に経櫃が並んでいた。当時はどの箱に何が入っているのか、はっきりしないという状態であった。そこで、築島先生は目録の作成をお寺当局に申し出て御住職の許可を得られ、国語学国文学に日本史、仏教学の研究者を集め、「高山寺典籍文書総合調査団」を組織された。そのメンバーは築島先生を団長に、東大名誉教授宝月圭吾先生、文化財保護委員会の近藤喜博先生、奈文研の田中稔先生、広島大学の小林芳規先生、文部省の山本信吉先生など13名の団員から成り、私も幸いなことに結成当初から調査団の一員に加えて頂いた。それからは毎年、三月・七月・十二月の三回、一週間ずつの調査が始まった。

その調査の間はすべてが勉強であった。宿泊・食事などもお寺にお世話になる日々では、到着して御前様にご挨拶申し上げることから始まって、挙措動作、作法の修業であり、調査の相手はいずれも千年近い昔の文献資料ばかり、自然と正座の背筋も伸びる。その持ち方、広げ方、巻子の開き方、巻き戻し方、すべて師の手ほどきを受けて、緊張して触れていった。何百年もの間に紙魚に依って貼り付いている紙丁を一枚ずつ息を止めて慎重に開いて行くこともあった。作業は、経蔵の悉皆調査を目標としていたので、二百ばかりあった経箱を順番に文献を一点ずつ半紙に巻いて点数を確定し、新しく定められたラベルが貼られ、箱番号と箱内での整理番号が墨書される。次に一点ずつについて調書を取る。それに記録すべきこととして、次のような項目がある。

番号・標題・数量・書写年代・筆署名・装幀・完欠・料紙・印記・界線・訓点・裏書・紙背文書・表紙表装・軸・破損

状態・表紙見返識語・奥書・内容に関する注記、

標題も内題と外題を区別し、資料の形体によって、巻・帖・冊・通・葉・鋪・幅・紙など数量の単位も区別しなければならない。文献の書写年代の推定は、年記のあるものでは歴史年表を手にしてその前後を判定し、奥書の無いものでは先生方にその時代判定をお伺いする。奥書の解読や料紙の判定（楮紙・斐紙など）、粘葉装、綴葉装、旋風葉装、袋綴装、折本装、卷子装などの形体の区別など、書誌学の演習のような時間が続く。時には、奈文研から参加された歴史家の先生の講義もあるという、高山寺大学とも称すべき一週間であった。文献の内容はそれを読まなくてはならない。そこに何を読み取るか、読解力の鍛練でもあった。なにかを発見してそれを注記する喜びをもあった。朝九時ごろ、経蔵から経箱を下ろしてくることから作業は始まり、夜は十二時ごろまで作業は続く。その間、夕食後の一休みには先生方のいろんな昔話を伺うのも楽しい一時であった。始めは境内の遺香庵と呼ばれる茶室が作業場兼寝室であったが、数年して、法鼓台道場という名の鉄骨二階建の一棟を建ててくださり、調査団員も増加した折柄、大変に有り難いことであった。最初、謄写版印刷された調書は、更に調査を重ねられて充実したものへと整備され、後に「高山寺経蔵典籍文書目録」全4巻として刊行された。その他の高山寺蔵の貴重な文献も度重ねての調査の上、「高山寺資料叢書」全24巻として刊行されている。団員も若手の研究者も加わり、今は60名近く、40年を過ぎてもなお調査団の事業は続けられている。



文学研究科中国学専攻 講師 吉田 公平

三島中洲は天保元年(1830)に生誕し大正八年(1919)に逝去した。享年九十。文字通り二世を生きた。幕末維新期の動乱の渦中の真っ只中で生きのび、大日本帝国時代には陽の当る位置にいた。中洲は、備中松山藩の山田方谷の門人で、幕末維新期に板倉勝静の側近として活躍し、明治時代に法曹界に入り、東京大学に奉職し、二松学舎を創設し、東宮侍講となった。この世代は公職に就き頭官に栄進した人物は数え切れない。立身出世を称賛した時流の所以である。中洲もその一人ではあるが、彼の魅力はそこにはない。

押し寄せる西学の刺激を受けとめて開明しながらも漢学を保守した一群の知識人を代表する一人である。この世代の人は漢学から洋学へ軸足を移した転向者がおおむね高い評価を受けた。時運を開拓するのは西学であると承知されたからである。この傾向は第二次世界大戦敗北後一層顕著になった。漢学は論壇から姿を消した。漢詩が新聞の文芸欄から消えた。漢学の衰頹に拍車がかかった。(わたしが中国哲学を専攻する旨を述べたおり、ある社会運動家が「ああ、死んだ学問ですね」と吐露された。その当時の学者の頭が西学の植民地であったことを如実に物語る)。

さて、今になって漢学が静に脚光を浴びる意義は何処にあるのか。さらに三島中洲が改めて研究されて然るべき理由は何処にあるのか。単なる懐古趣味ではあるまい。

第一は、歴史事実の確認である。進歩史観に禍いされて明治帝政に深く関与した漢学・漢学者は一捌けに守旧派と決めつけられてしまい、箇々の人物の立ち位置を個別に解明したり、箇々の漢学者たちの作品を鑑賞し、その思想を読解解析することは、なおざりにされがちであった。西学の人も漢学を基礎にしている事実が等閑視されたが故である。歴史事実のままに理解しようという気運が漢学をありのままに見直す契機になっている。

第二は、進歩史観からは守旧派と酷評された漢学者の思想を再解釈する気運である。主権在民を根本とする国政において、天皇主権の帝政を果敢に支持した当時の漢学者の思想を再評価することは時代錯誤である。彼等が帝政社会向きに提言した箇々の言説は今日の社会では通

用しない。その違いを承知した上で、箇々の言説が紡がれた発想の源泉を汲み取って、当世向きの提言をする際に、思索の資源として活用できるのではないか、という思いが再解釈を促す契機になっている。かれらの発想の源泉を更に原始に遡れば良いという考えもあるが、近い過去の具体的な事例に源泉を求める方が、提言としては親和性が富むので、より有効であろうという気概である。中洲に即して語ろう。

中洲の代表的な提言に義利合一説がある。山田方谷は、王陽明の「理は気の條理」を発展させて「気は理を生ずる」説を説いた。中洲はそれを基礎にして、西来の功利主義に対抗して展開した立論である。社会正義と利益追求の両者が平衡を保って実現することを述べたその理念は今日も生きている。この立論の根柢には人の本性は善であるという性善説と身心を一如とみる身体論が基礎にある。身心一如論・性善説の展開可能性の一事例を中洲に見る事ができる。拝金主義が横行し、身体を危害する事件が深刻な今日、経済活動の在り方、他者の身体の捉え方を、提言しようとする時、中洲が採用した原理は今日でも思索の一資源としては有意味である。それにつけても思索の資源の宝庫である漢学の世界、とりわけ、三島中洲の全集が未刊なのは惜しみて余りある。歴史事実を確認してそこに今日的価値を見出すためには、思索資源の発掘整理は不可欠の基礎作業である。成果主義の悪弊が跋扈する世情ではあるが、関係者の英断を期待したい。



本学教員出版一覧

[平成19年11月1日～平成20年10月31日出版、附属図書館受入分]

①今西幹一著

『佐藤佐太郎短歌の研究-佐藤佐太郎と昭和期の短歌-』

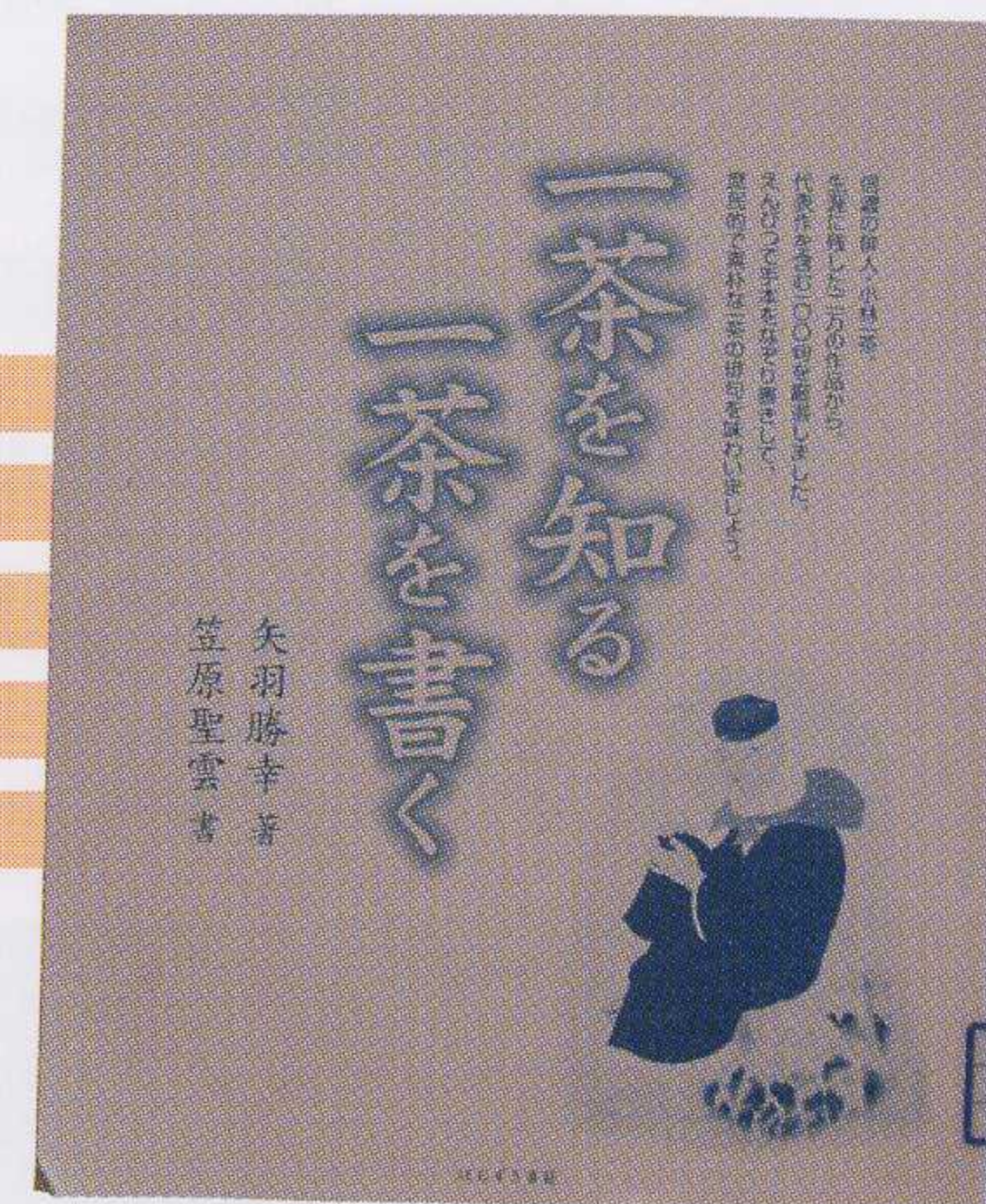
おうふう 平成19年11月 8,000円



④矢羽勝幸共著

『一茶を知る 一茶を書く』

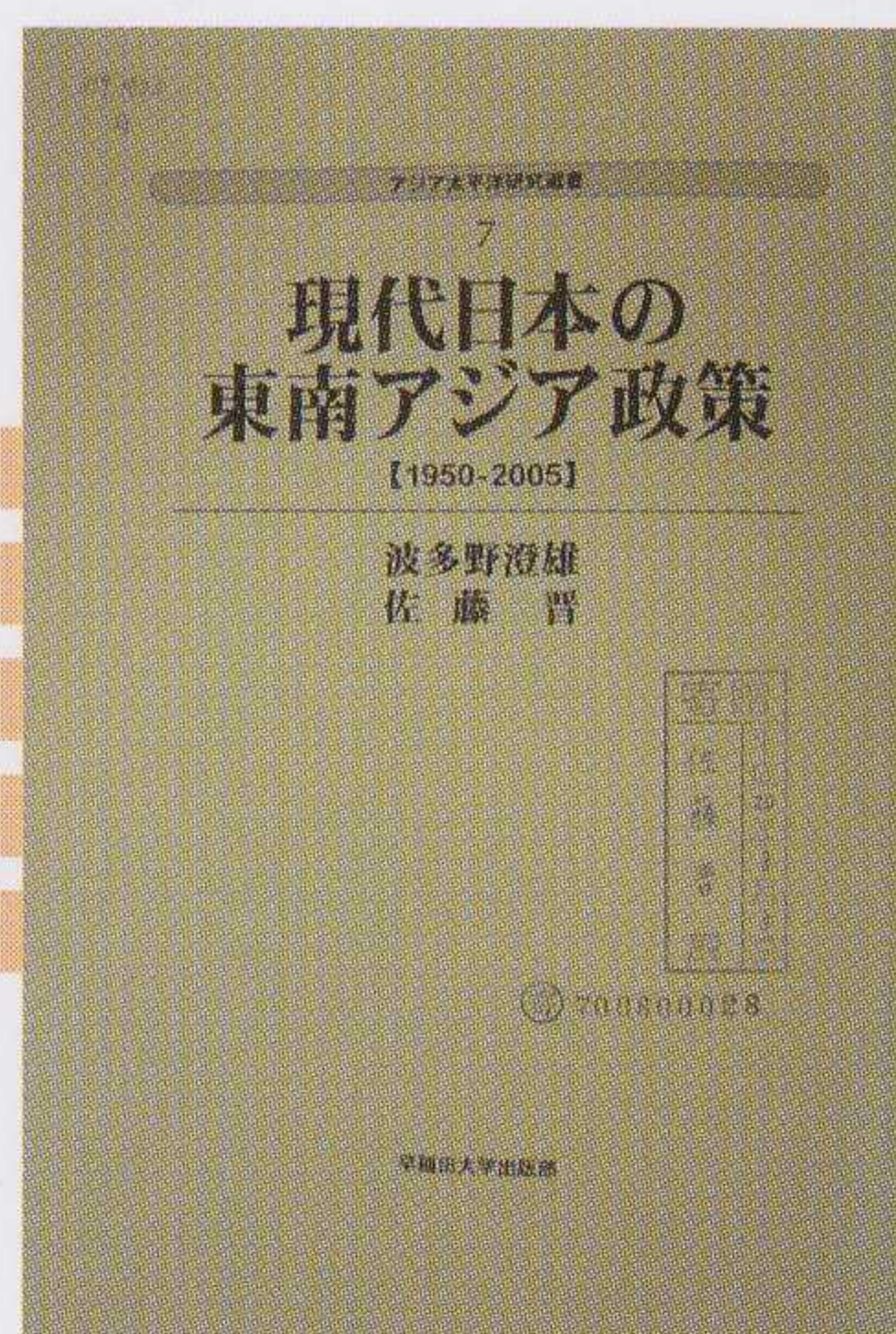
ほうずき書房 平成20年5月 1,500円



②佐藤晋共著

『現代日本の東南アジア政策〈1950-2005〉』

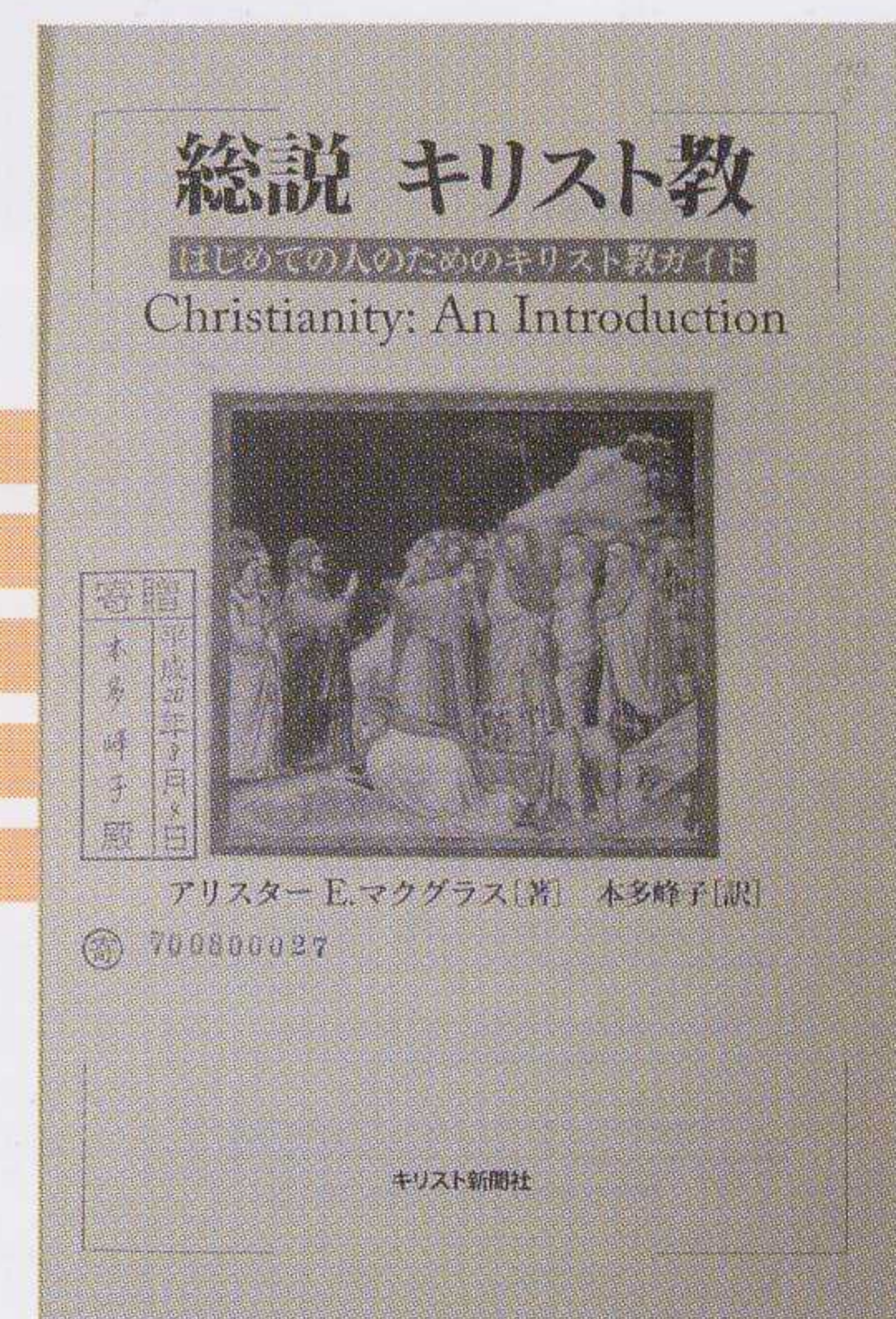
早稲田大学出版部 平成19年11月 3,900円



⑤本多峰子訳

『総説キリスト教-はじめての人のためのキリスト教ガイドー』

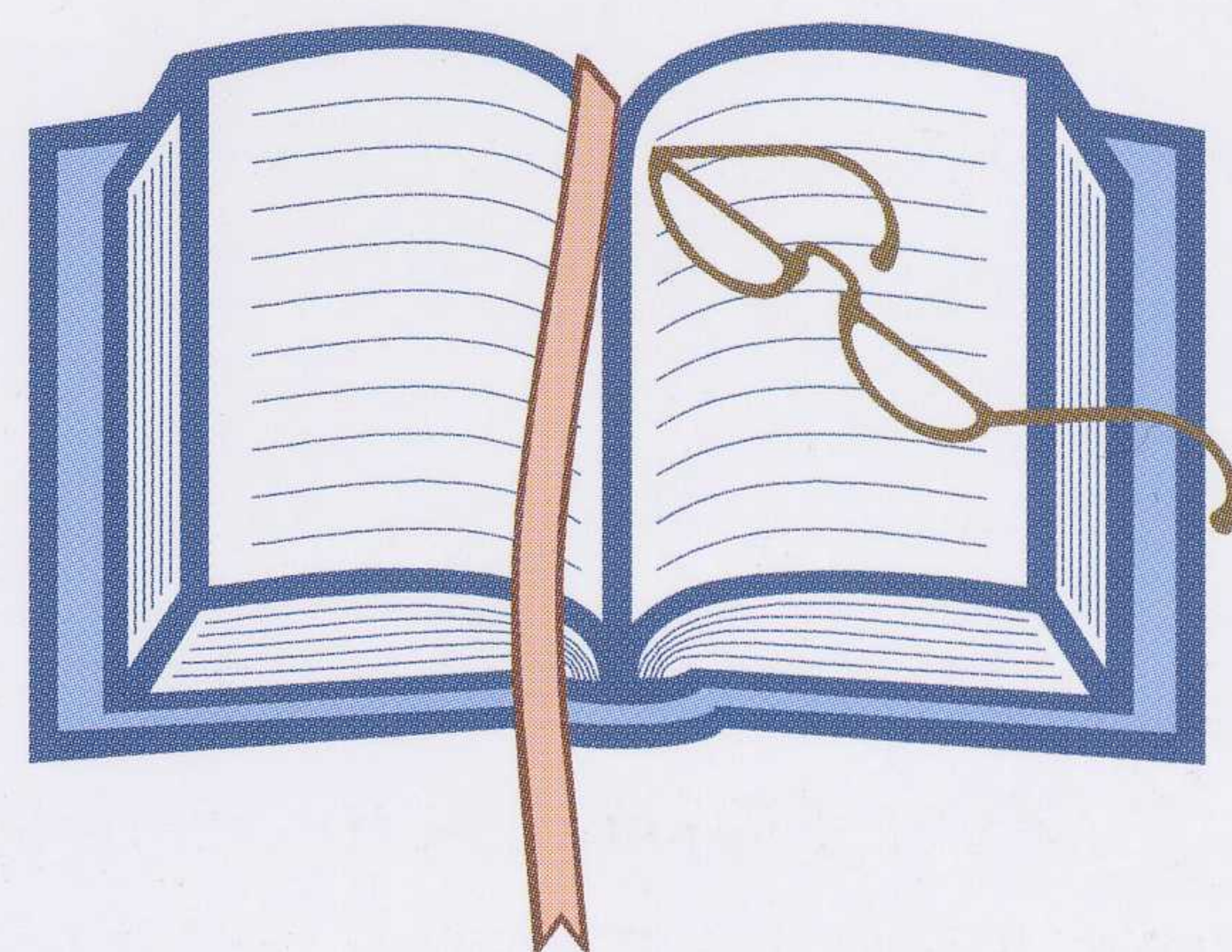
キリスト新聞社 平成20年6月 7,500円



③矢羽勝幸編

『増補改訂 加舎白雄全集』上・下巻

国文社 平成20年2月 各11,550円



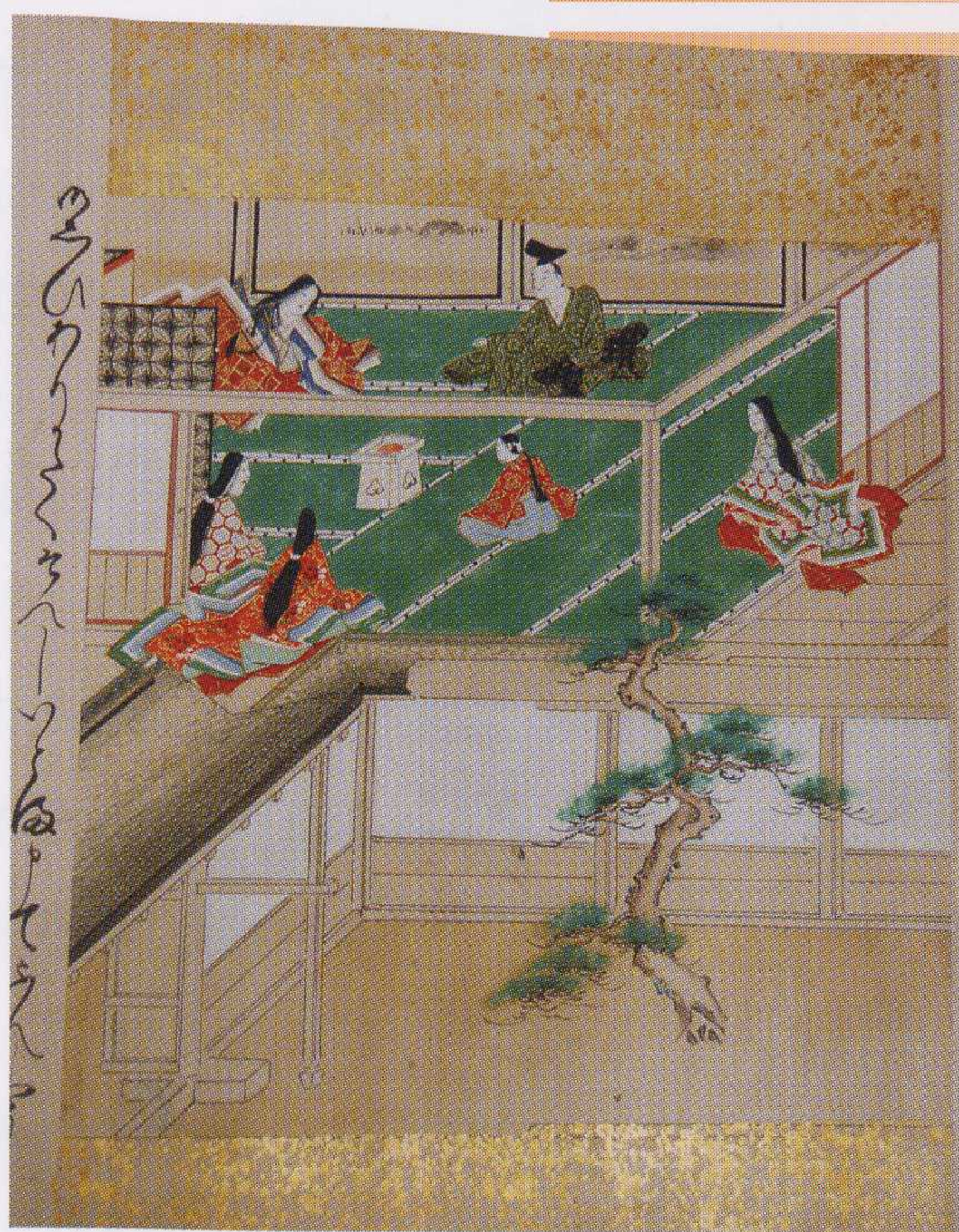
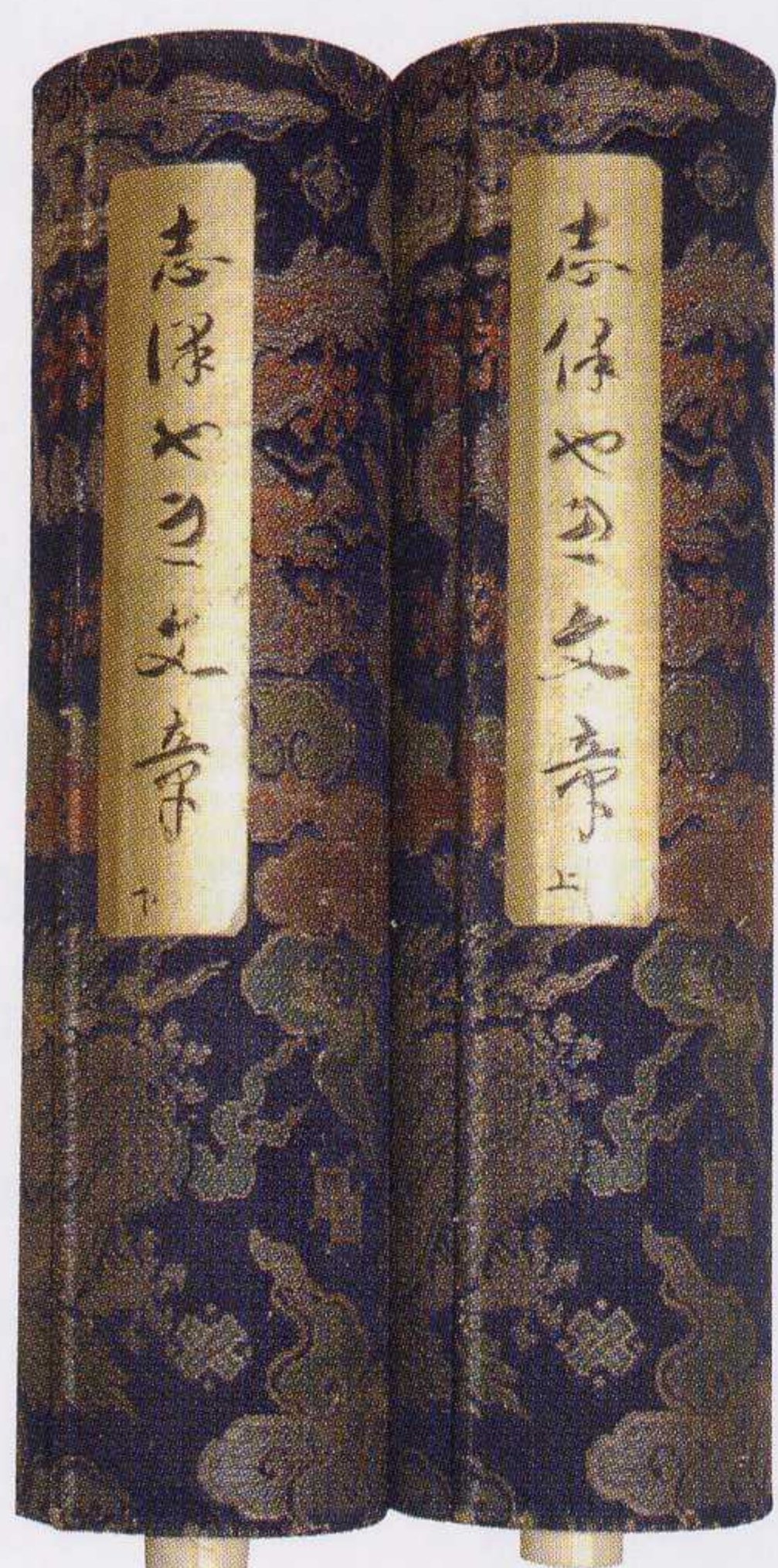
## 資料紹介

### 『絵入 志保やき文章』全2巻

『文正草子』(一般呼称)は、御伽草子23篇中第1番に置かれ、製塩で財をなした文正が、娘によって大納言へとのおぼるといふ、めでたい内容の庶民物祝儀物の御伽草子である。本館所蔵の『絵入 志保やき文章』2巻は、この『文正草子』の大型奈良絵本で、早い段階に巻物に仕立て直したものである。仕立て直しによる錯簡が認められるが、首尾揃ったものである。

上巻約15m、下巻約14m、縦29cmの大型で長尺絵巻となっている。挿絵は、上巻10枚、下巻10枚(内1枚見開き)である。

挿絵は公開されている他大学所蔵本より、細密で丁寧に描かれている。



資料紹介

『宝石』

探偵小説雑誌。創刊号は昭和21年4月に岩谷書店から発行された。その後、昭和31年7月号から宝石社発行となる。昭和39年5月の通巻251号(「創刊250号記念特集号」)をもって終刊となる。

創刊号表紙は「探偵小説雑誌 寶石 The JeWeL」とある。表紙裏には、江戸川乱歩の写真と武田武彦による写真

解説が載る。作品は、横溝正史「本陣殺人事件」、丘丘十郎「密林荘事件」、大下宇陀児「鬢(かつら)」、江戸川乱歩の随筆「二人の新人」等が載る。

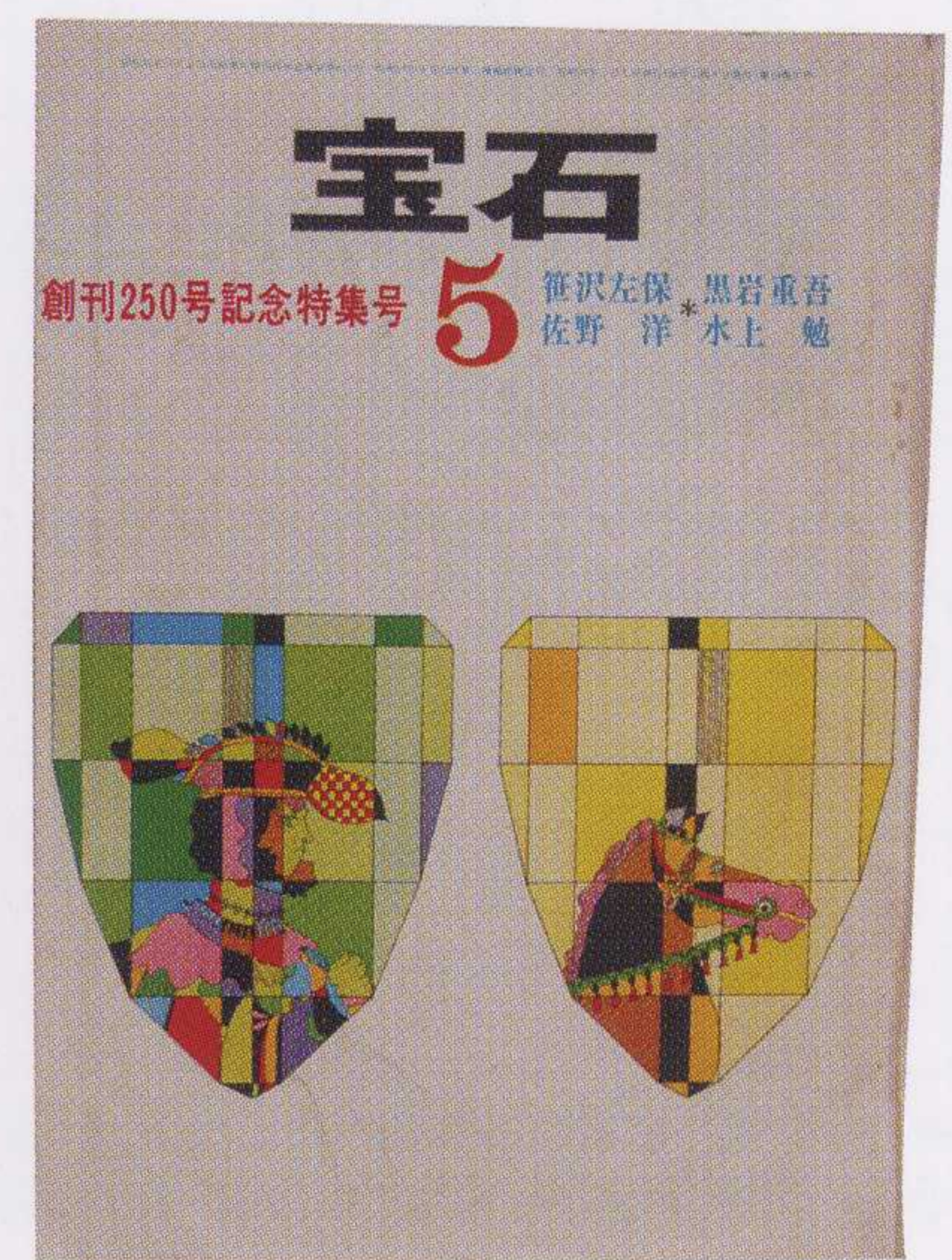
本学には、創刊号から終刊号まで全巻揃いで収蔵されている。



(創刊号)



(2号)



(終刊号)

『別冊 宝石』

探偵小説雑誌。創刊号は昭和23年1月に岩谷書店から発行されたが、創刊号には「別冊宝石」の字はなく、「寶石 編集部選 捕物と新作長篇」となっており、2号から「別冊宝石」と題された。

創刊号は「新進作家長篇集」「捕物小説傑作集」に大きく分かれ、「新進作家」には、島田一男「通夜化粧」、山田風太郎「眼中の悪魔」等が、「捕物作家」には野村胡堂「青

銭と鍵」、横溝正史「狸の長兵衛」等が載る。また、「探偵作家訪問記」というコーナーもあり、江戸川乱歩・大下宇陀児・海野十三・横溝正史等の名前が見える。

終刊号は昭和39年5月号の通巻130号(「異色ミステリー特集」)である。

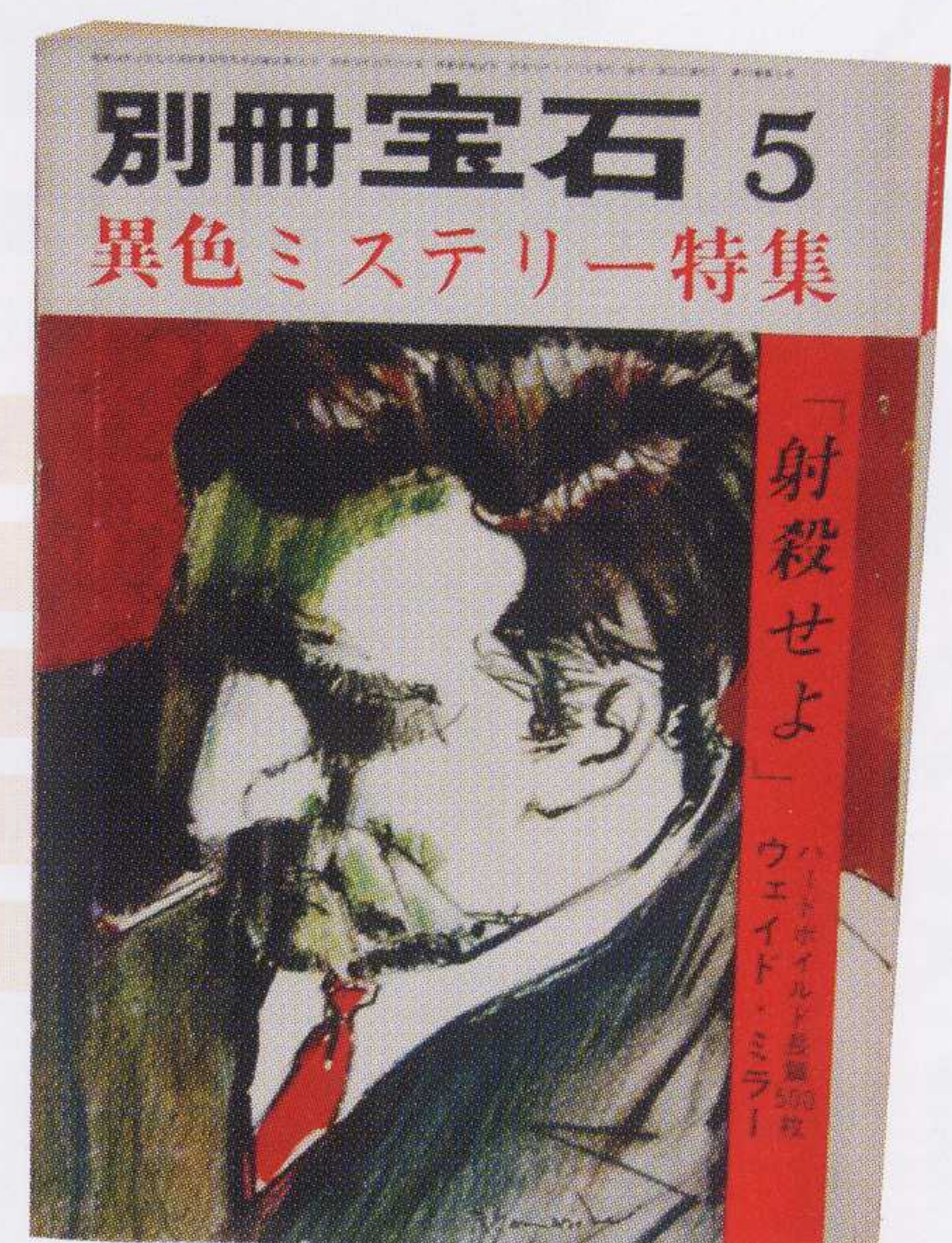
本学には、創刊号から終刊号までのうち、18号が1冊欠号しているが、ほぼ全冊揃いで収蔵されている。



(創刊号)



(2号)



(終刊号)

開館日 案内

3月の開館日案内

九段				柏	
閉館	1	日		閉館	
9:00 ~ 16:20	2	月		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	3	火		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	4	水		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	5	木		9:15 ~ 16:00	
閉館	6	金		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	7	土		閉館	
閉館	8	日		閉館	
9:00 ~ 16:20	9	月		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	10	火		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	11	水		9:15 ~ 16:00	
閉館	12	木		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	13	金		9:15 ~ 16:00	
閉館	14	土		閉館	
閉館	15	日		閉館	
9:00 ~ 16:20	16	月		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	17	火		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	18	水		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	19	木		9:15 ~ 16:00	
閉館(春分の日)	20	金		閉館(春分の日)	
9:00 ~ 16:20	21	土		"	
閉館	22	日		閉館	
閉館(年度末作業のため)	23	月		閉館(年度末作業のため)	
"	24	火		"	
"	25	水		"	
"	26	木		"	
"	27	金		"	
"	28	土		"	
閉館	29	日		閉館	
閉館(年度末作業のため)	30	月		閉館(年度末作業のため)	
"	31	火		"	

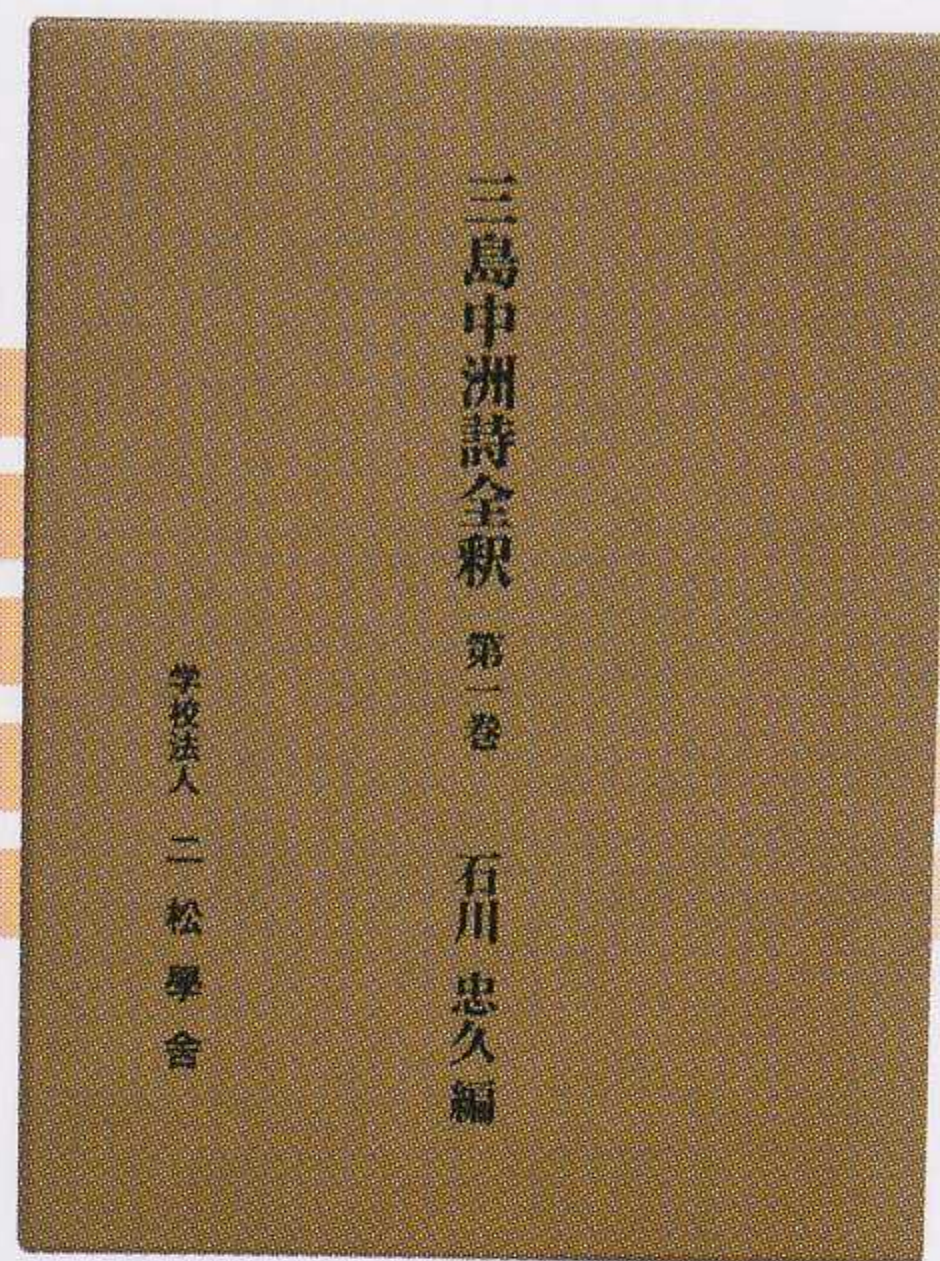
※ 開館または閉館時間を変更しています。ご注意ください。  
 ※ 開館時間等が変更になる場合は、随時、訂正版や掲示等でお知らせします。

本学の出版物紹介(抄)

●『三島中洲詩全釈』第1巻

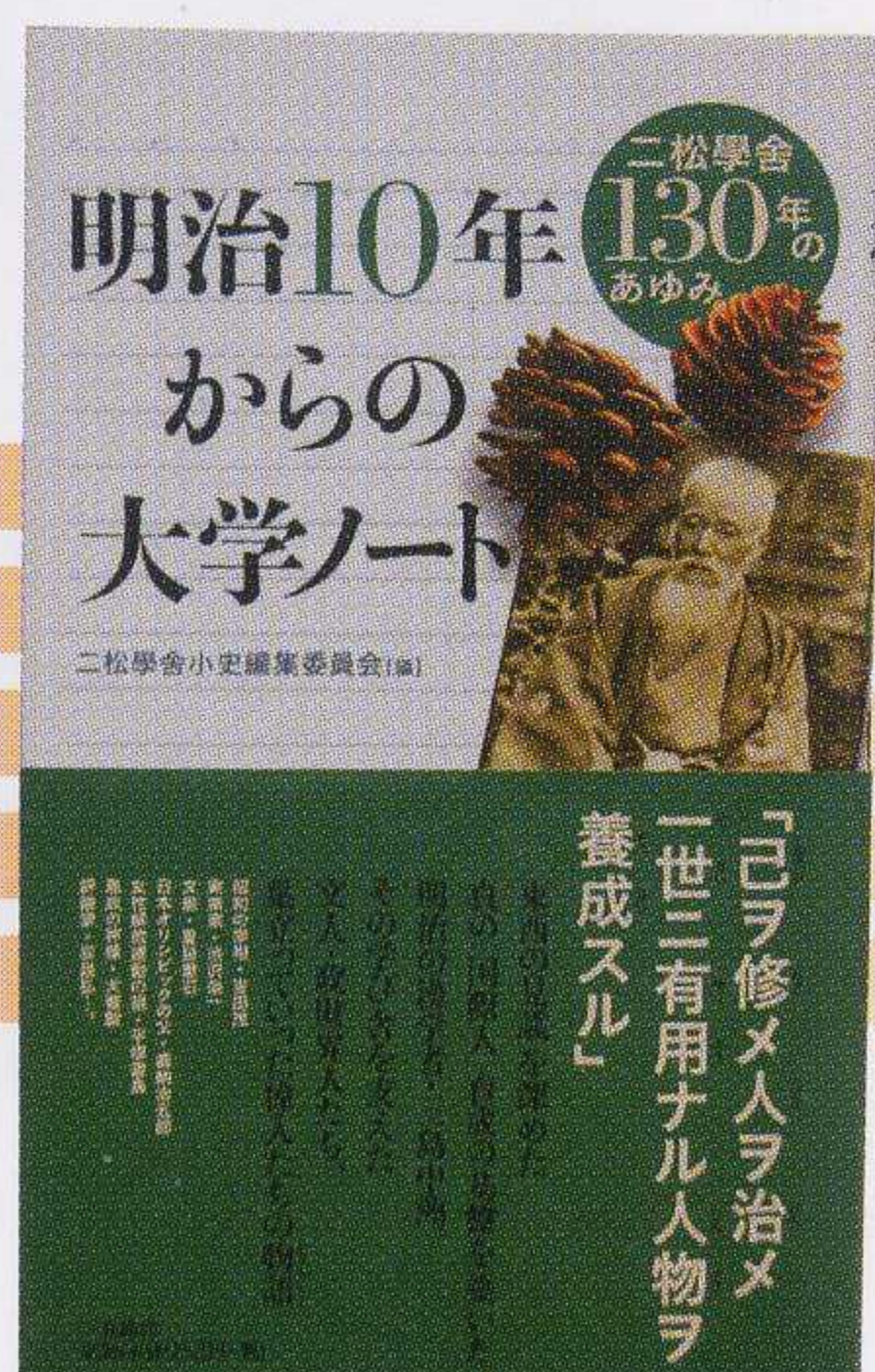
嘉永5年～明治15年、中洲53歳、東京大学教授在任中、  
 二松学舎を創立して6年目までの651首を収載。

石川忠久編 学校法人二松学舎発行  
 平成19年 B5判 744頁



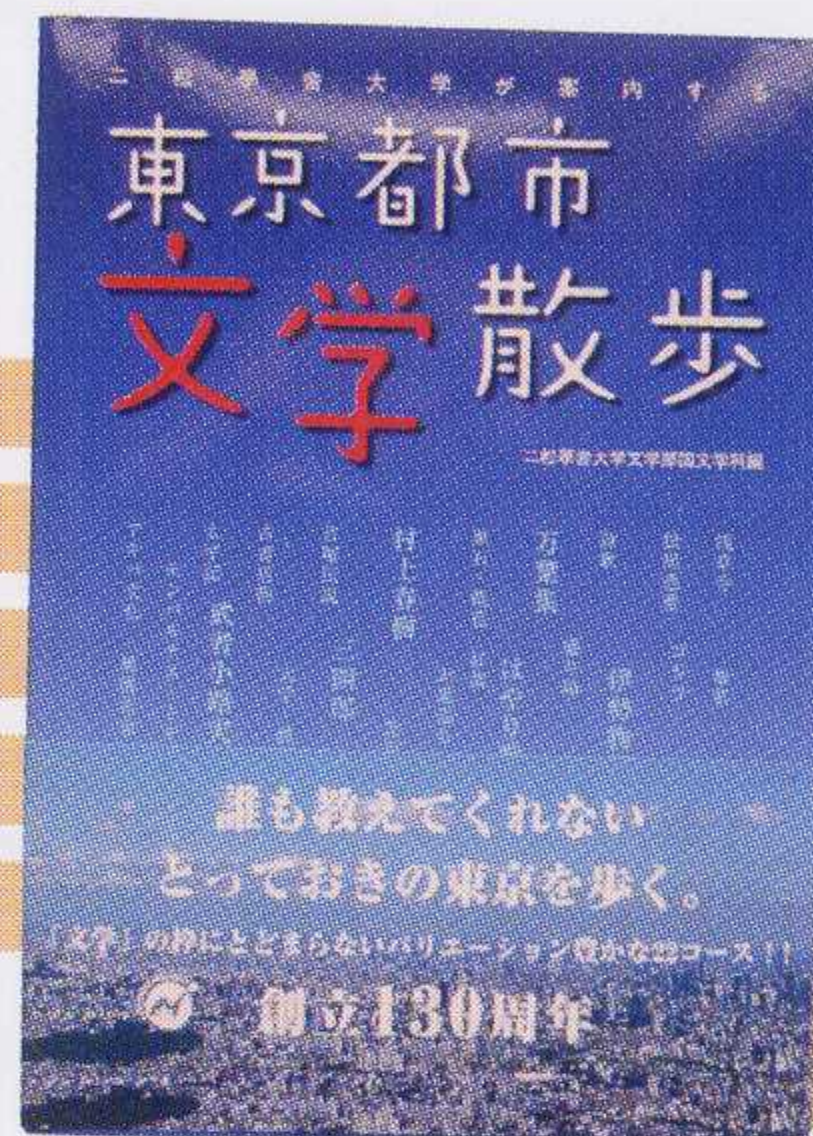
●『明治10年からの大学ノート 二松学舎130年のあゆみ』

二松学舎小史編集委員会編 (株)三五館刊  
 平成19年 新書判 287頁 (市販952円+税)



●『二松学舎大学が案内する 東京都市文学散歩』

二松学舎大学文学部国文学科編 戎光祥出版(株)刊  
 平成19年 A5判 126頁 (市販1,000円+税)



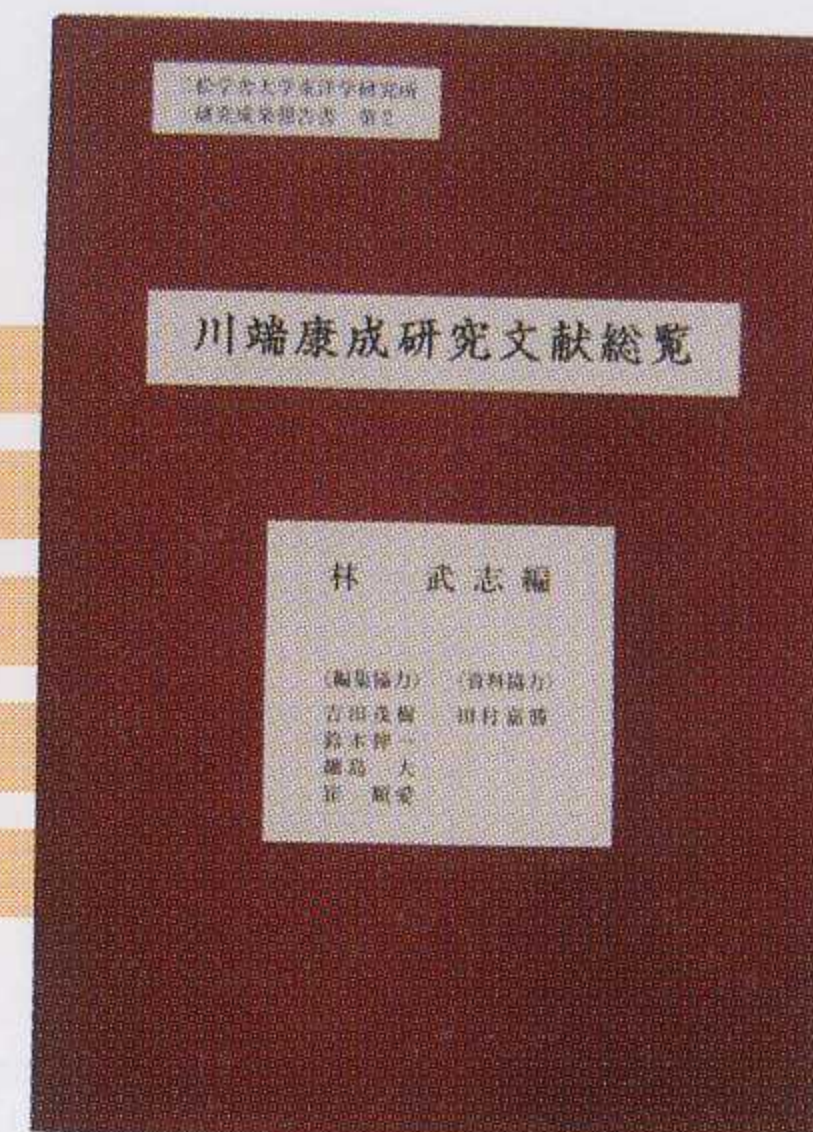
●『拾遺和歌集増抄の本文と研究』

[二松学舎大学東洋学研究所 研究成果報告書 第1]  
 山崎正伸著 平成13年 B5判 684頁



●『川端康成研究文献総覧』(CD付)

[二松学舎大学東洋学研究所 研究成果報告書 第2]  
 平成11(1999)年12月末日までの資料を収載。  
 林武志編 平成13年 A4判 354頁



以上の出版物の問い合わせは、図書館まで。

表紙解説

『宝石』『別冊宝石』

『宝石』『別冊宝石』とも探偵小説雑誌。創刊号は『宝石』が昭和21年4月、『別冊宝石』が昭和23年1月にそれぞれ岩谷書店から発行された。後、宝石社になる。第二次世界大戦後のミステリー文芸に関する資料として重要である。

二松学舎大学附属図書館  
 季報  
 第71号

発行日 平成21(2009)年2月10日  
 発行 二松学舎大学附属図書館  
 九段校舎図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16  
 電話:03-3263-6364  
 柏校舎図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590  
 電話:04-7191-8758  
 印刷所 株式会社 サンセイ  
 電話:03-5614-2515